

千葉市史編さん担当

〒260-0856

千葉市中央区亥鼻 1-6-1

千葉市立郷土博物館

TEL 043-222-8231

編さん便り

Chiba-shishi News Letter NO.8 2012.3

あれから一年。

地震災害

を考える

早いもので、東日本大震災から一年が経過しました。昨年3月11日は、日本国内の誰にとっても忘れられない日となりました。

歴史的にみても未曾有の大地震、大災害でした。千葉市域がこれだけ大きな地震に見舞われたのは、恐らくこれ以前には大正12年(1923)の関東大震災くらいではないでしょうか。

今回は、関東大震災当時の千葉の様子を、当時記された資料などから幾つか抜粋でご紹介します。

…千葉郡に到ては被害の程度漸く軽く、我千葉市に於ては倒潰家屋八戸、重軽傷者の多数を出したるも、火災の厄を免れたるは誠に幸運なりき、…茲に特筆すべきは登戸に於ける千葉第四部小学校舎の倒潰なり、該敷地は地盤の関係なるにや六尺余の波状的陥没の為に全部倒潰し、…

(田村六三郎『震災の巻』、千葉市立郷土博物館所蔵加藤博仁氏収集資料より)

この日、生徒は午前で帰宅したため、無事だったようですが、比較的被害が軽いとされる千葉市域においても、こうして大きく「倒潰」する建物があったことがわかります。筆者は、この震災に際し句を詠んでおり、それを併せて掲載していますが、「千葉所感」の項に

『千葉市史』編さんのため、古い資料・昔の写真などの情報を集めています。たとえば、ご家庭で撮影されたスナップ写真も、当時の「千葉」をみることでできる貴重な資料です。いわゆる「古文書」も大歓迎です。聞き取り調査も行いたいと思っています。戦時中の体験など、幼い頃の記憶など、千葉市域に関してお話しただけの方がおられましたら、ご連絡ください。ご提供頂いた資料、伺ったお話の内容の扱いには、十分配慮致します。皆さまからの情報提供をお待ちします。

資料、求め。

第4回 農民の苦悩を詠った歌人

伝えています。彼が短歌を詠み始めたのは、第一次大戦の影響で物価が高騰し、生活が苦しくなってきた時期でした。また、誉田の辺りは『土の歌』の中にも「開墾部落」として詠まれているように、明治期の十文字野の開発などで他所から移住してきた小作農が多い土地柄でした。

昭和6年(1931)には旧ソ蓮のスパルウィン博士の著作により中村の歌が旧ソ蓮に紹介され、また「おちおちと夜も眠らず繭を取れど 絹の着物も持てぬ妹」の一首は大英百科辞典に掲載されるため、英訳されたといえます。昭和22年には、清瀬保二の手で歌集の中から四十余りが作曲され、その後レコードにもなったようです。シンプルであった彼の歌は、文学的な評価以上に、世間からの共感を呼びやすかったといえるでしょうか。

中村は昭和13年には農事一切を実弟に譲り、亥鼻の大学病院坂下に古書店を開業、戦後もしばらく続けていたようですが、晩年は誉田町へ戻り、再び農業をして暮らしたとのこと。

※参考；『誉田のあゆみ - 誉田小学校創立百周年記念誌 -』

鳥海宗一郎『房総文学散歩』など

ちば歴史散策こぼれ話

千葉市緑区誉田町に、怨閑塚(じょかんづか)があります。日蓮宗不授不施派の僧侶日浄が寛永11年(1634)、十文字ヶ原で斬首となり、その遺骸を葬った地です。この塚の近くに、中村孝助(なかむら こうすけ)という歌人が住んでいました。

中村は明治34年(1901)生まれ、家の手伝いをしながら短歌を勉強し、新聞・雑誌などに投稿していました。大正14年(1925)には口語歌運動を進めていた雑誌「芸術と自由」主宰者の西村陽吉に歌を持ち込み、それが認められて『土の歌』として翌15年に刊行されました(写真)。



中村は、貧しい小作農の生活を素朴な表現で歌っており、その作品はいわゆるプロレタリア文学的色彩を強く帯びたものといえます。彼自身が「文字知らぬ 人達に聞かせてもよくわかる歌が 欲しいと友と話した」と歌っている通り、技巧に走らず、わかりやすく当時の農民の姿を

平成24年度 千葉市史主催 講座のご案内

1 市史研究講座

定員 200 人。会場；千葉市民会館小ホール。

対象；千葉市に在住・在勤・在学の方。

各講座 90 分(午後からの開催予定)。

日程及び各回のテーマは以下の通りです。

10/13 (土)；原始～古代

10/20 (土)；中世

10/27 (土)；近世

※講師の先生や各講演の詳しい内容については未定です。市政だより(9月1日号を予定)にて募集しますので、詳細はそちらをご覧ください。

2 古文書講座

初級古文書講座

古文書読解初心者対象。テキストは江戸時代に書かれた古文書の複写。くずし字の基礎を学ぶ講義形式の講座。全5回。講師・日程いずれも未定。同じ内容で前期・後期の二回開催予定。

中級古文書講座

古文書に慣れ、ある程度読める方を対象。テキストは江戸時代に書かれた古文書の複写。全5回。

講師・日程いずれも未定。

※初級古文書講座・中級古文書講座はどちらも市政だより(掲載日未定)にて募集します。

どちらも定員 30 人。会場；千葉市立郷土博物館講座室。

どの講座も往復葉書でのお申し込みです。

住所・氏名(ふりがな)・年齢・性別・電話番号を明記のうえお申し込みください。

(葉書一枚につき一人のご応募をお願いいたします)

詳細は市政だより・郷土博物館 HP でご確認ください。

http://www.city.chiba.jp/kyoiku/shogaigakushu/shogaigakushu/kyodo/kyodo_top.html

※申込み多数の場合、抽選となります

ちば市史編さん便り 8 号をお届けします。

震災から早いもので一年が経ちました。そのせいか、最近また地震が多い気がします。震災での教訓を活かして、資料の救済含め、様々な対策を早めに練ることができればと思います。

直に桜も咲き、散歩にちょうどよい気候となります。市史編さん担当のがいる千葉市立郷土博物館の周辺も、毎年桜がとてもきれいです。昔の姿に思いをはせながら散歩されてはいかがでしょうか？という意味を込めまして、昔の絵はがきを載せました。お散歩のお供になれば幸いです。

あとがき

明治24年の『千葉繁昌記』に「県下第一の美橋」とあり。欄干に明治21年千葉県設計と刻まれていた。長八間・幅四間。写真の橋は関東大震災後に掛け替えられたもの。



大和橋

千葉県庁



明治8年千葉町におかれた庁舎の老朽化のため、同44年4月に37万300余円をかけて完成した新庁舎。

千葉県師範学校と県立千葉中学校



千葉県尋常師範学校が明治30年にこの地に改築。翌千葉県師範学校と改称。卒業生は県下の教育界に奉職した。現千葉大学教育学部の前身。県立千葉中学校は明治11年創立。始め師範学校内の一部を校舎にした。同32年には現在地へ新築移転。卒業生には名士も多い。現千葉県立千葉高等学校の前身。

千葉神社



千葉家累代の祈願所。江戸時代には妙見寺として200石の朱印地を持っていた。明治維新を迎え千葉神社と改称。

お茶の水



千葉常胤が源頼朝にお茶を供した井戸と伝えられる。長らく埋もれていたが、明治44年(1911)に町内の有志により修復された。

この辺りに中村の古書店か？

別館

牧野屋旅館



明治28年(1895)大和橋際に創業。のち猪鼻山麓にも別館料理部を設けた。明治44年刊『千葉街案内』では「千葉町第一流の班に列す」と評されている。

千葉医学専門学校



元千葉県千葉医学校。写真の校舎は明治23年(1890)に58,040円をかけて建設されたもの。

鮎田の池



千葉城の東方の要害として設けられた。大部分は水田となり、明治44年段階でも小さな池を残す程度ではあったが、「鮎田の落雁」と称され「千葉八景」のひとつに数えられた。現在も青葉の森公園の一角などにわずかに姿を残しています。

JR・京成千葉駅
京成千葉中央駅方面

↑ JR東千葉駅方面

大和橋

お茶の水

都川

裁判所

神明社

千葉大学
亥鼻キャンパス

郷土博物館・
千葉県文化会館前

→ 中央博物館方面

千葉県庁

千葉市立
郷土博物館

いのはな亭

智光院 卍

胤重寺 卍

千葉県立
中央図書館

千葉県
文化会館

卍 東禅寺

千葉県
警察本部

← モノレール「県庁前」
JR本千葉駅方面

卍 高德寺

千葉寺と大銀杏



和銅2年(709)、伝行基開基。坂東三十三観音霊場の二十九番札所。千葉家累代の祈願所。明治24年刊の『千葉繁昌記』によれば「此観桜の一事正に葉街の繁昌を維持するの価値あり」といって千葉町の人々はこぞってその培育のため賽銭を奮発したという。

今年も桜の美しい季節になりました。観桜のついでに、亥鼻近辺のむかしの姿に思いを馳せながら散歩してみませんか？

絵はがきを持って
亥鼻散歩

*ここでご紹介した絵はがきはどれも千葉市立郷土博物館所蔵の加藤博仁氏収集資料のものです。「千葉名勝」や「千葉古蹟」といったシリーズで、こうした絵はがきが発行されていました。